

## Malory における文頭要素と倒置・非倒置語順に関する考察

小林美樹

### 要旨

OE は広義の意味での V2 言語であり、主語以外の要素が文頭に置かれると名詞句主語は VS 語順に起こることが一般的であった。ME 中に英語は非 V2 言語への道をたどり、VS 語順が起こる構文は限定的になっていく。本稿では ME 末期の Malory における文頭要素と倒置・非倒置語順の関係を観察し、OE から受け継いだ古いタイプの語順が一律に減少して非生産的になっていくのではなく、①或る一定の型に合致した表現形式に使用が限定されていく過程にあると考えられるタイプと、②ME 末期においても高い生産性を保っていたことが伺えるタイプがあることを明らかにする。比較的数多く起こる倒置構文が必ずしも生産性が高いとは言えず、文法変化の観察においては、構文の出現頻度に加え、生起する動詞の多様性、助動詞・語彙動詞の区別、文全体の担う意味等を考慮することが必要である。本稿は OE から PE への語順変化の流れにおいて Malory の語順がどのような段階にあるのかを、上に述べたような観点から考察するものである。

### 1. はじめに

OE はドイツ語のような厳密な意味での V2 言語とは異なるものの、広義の意味では V2 言語であり、主語が代名詞ではなく名詞句である主節においては、多くの場合 V2 現象が観察される。文頭に副詞や目的語等、主語以外の要素が置かれる場合には、定形動詞＋名詞句主語の語順が原則的である<sup>1</sup>。また、疑問詞や否定辞、*þa* ('then'), *þonne* ('then'), *nu* ('now') (以下では *then*-group と呼ぶ) が文頭に来る場合には主語が代名詞であっても VS 語順になる。しかしこのような V2 現象は 15 世紀に失われたとされる (Haerberli (2002), Komen et al (2014))。

本稿では 15 世紀の作品である *The Works of Sir Thomas Malory* (Malory) を資料として VS 語順と SV 語順を観察し、Malory に見られる「OE 的な古い語順」と「ME 期に生じた新しい語順」について考察する。次節で Haerberli (2002) による OE から ME にかけての倒置現象の変移に関する考察を概観し、2.2 節では、OE において文頭要素が担っていた文脈連結の役割は、ME 中の V2 の消失とともに次第に主語が担うようになり、文頭要素はその役割を消失していったということを示す Komen et al (2014) の研究を紹介する。3.1 節で Malory に見られる語順に関し、OE 的な古い語順と ME 期に新たに生じた語順の分類を行い、3.2 節ではこの分類に従って Malory に現れる様々な文頭要素と倒置・非倒置語順の関係を観察する。4 節では Malory において文頭要素が担う文脈連結役割について考察し、5 節で本稿のまとめをおこなう。

## 2. 先行研究

### 2.1. Haerberli (2002)

Haerberli (2002) は Brooklyn-Geneva-Amsterdam-Helsinki Corpus of Old English を用いて散文を調査し、原則的には V2 言語とされる OE の主節において、文頭の要素が疑問詞、否定辞、*then*-group 以外であり、かつ主語が代名詞ではない場合、VS 語順が起こらない割合が 28.7%であることを示している。OE においては定形動詞が第二位に置かれている(1)のような VS 語順が原則ではあっても、第二位以外の位置に定形動詞が起こる(2)のような SV 語順も稀ではないということである。

- (1) [pinre meder] geheolp þin halga geleafa  
 your mother helped your holy faith  
 (Ælfric's Lives of Saints, I, 212.28)  
 'Your holy faith helped your mother.'  
 (Haerberli (2002:245))

- (2) [ðone] Denisca leoda lufiað swyðost  
 that Danish people love most (Wulfstan, 223.54)  
 'The Danish people love that one most'  
 (Haerberli (2002:249))

どのような場合に(2)が示すような V2 ではない語順が起こるのかについては、文頭に来る要素が項であるか付加詞であるか、また主語が長いか短いかといった違いから単純に説明することは出来ないとしている。

OE において(2)のような例外は少ないわけではないが、より多くの場合(1)のような V2 現象が観察され、この状況は ME 初期においても変わらない。しかしその後 VS 語順は急速に減少し、ME 中に英語は非 V2 言語へと変化していく。Haeberli (2002)は The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English を用い、14 世紀から 15 世紀に書かれた 33 の散文テキストの中で、主節において疑問詞、否定辞、*then-group* (ME において OE の *þa* ('then'), *þonne* ('then'), *nu* ('now')と同等の意味・機能を持つ語)以外の語句が前置された場合、名詞句主語の倒置がどの程度の割合で起こっているかを調査している。なおこの調査は、彼が *Type I inversion* と呼ぶ①述語の前置、②場所句の前置、③時の副詞句や *thus* などのある特定の付加詞が文頭に置かれること、など現代英語でも倒置が起こりやすい環境での倒置を除いて行われている。調査の結果は 33 テキストのうち 23 テキストにおいて、名詞句主語と動詞の倒置が起こらない割合が 50%を超えていることを示している((Haeberli (2002:253-254))。非倒置の割合が 90%以上であるテキストも 6 つ存在し、また本稿で考察対象とする Malory の非倒置語順の割合は 87.1%で、これは 33 テキストの中で 8 番目に高い。その意味では Malory に見られる語順はかなり現代英語のそれに近づいていると言えるであろう。

このようなコーパスによる調査から、Haeberli (2002)は 15 世紀までに英語において VS 語順は一般的なものではなくなったとしている。そして ME においてもまだなお見られる VS 語順について、どのような場合にこのような倒置語順が起こりやすいのか、倒置を引き起こしやすい要素は特定できるのかについて考察している。現代英語にも残る *Type I inversion* 以外では、VS 語順は(3)のような受動文で見られることが多いということである。

- (3) [Forsothe] [to Adam] was not foundun an *helpere lijk hym*.  
(OTest, II, 20G.97)  
'Surely, a helper like him was not found for Adam.'  
(Haerberli (2002:255))

しかし他にも(4)のような他動詞文を含め、様々な構文で倒置語順が起こっている。

- (4) [Thyse wordes] sayd *our sauycour Ihu Cryst* of the temple of his holy body.  
(Fitzja, A5V.82)  
'Our Savior Jesus Christ said these words about the temple of his holy body'  
(Haerberli (2002:258))

またどのような要素が文頭に置かれると倒置語順が起こりやすいかということについても考察を行っているが、XVS 語順の X の位置には様々な副詞や前置詞句の他、目的語等の項も起こることを観察している。上の(4)でも他動詞 *sayd* の目的語である *Thyse wordes* が前置されている。

このように、既に SV 語順が一般的となった ME においても様々な形の文の中で倒置語順が起こっており、どのような要因が倒置語順を引き起こしやすいかを明確に述べることは出来ない。また、主語が長いか短いかということも倒置語順の起こりやすさの決め手にはならないとしている(Haerberli (2002:259))。

以上、名詞句主語の倒置語順について述べてきたが、ME 期には代名詞の倒置語順も観察される。OE では疑問詞、否定辞、*then-group* 以外の要素が文頭に置かれた場合、代名詞は原則的に倒置語順にならない。しかし Haerberli (2002) の調査は、OE では一般的に代名詞主語の倒置が見られない環境(疑問詞、否定辞、*then-group* 以外の要素の前置)でも、ME においては代名詞の倒置が起こっていることを示している。OE と ME 初期において名詞句主語と代名詞主語が倒置語順に関して見せていた明白な違い一名詞句主語と異なり、代名詞主語は疑問詞、否定辞、*then-group* 以外の要素が前置されても原則的には倒置語順にならないという代名詞主語の特徴的振る舞い—は ME 後期に消失したとしている(Haerberli (2002:260))。

## 2.2. Komen et al (2014)

英語が原則的に V2 言語であったとき、主語以外にも様々な要素が文頭の位置に起こる可能性があった。この文頭位置は談話連結の機能を担っていたと考えられるが、Komen et al (2014) は、英語が V2 言語ではなくなっていくのに伴い、このような談話連結の役割を担う文頭の副詞的要素が減少し、主語が担う役割が増し、またどのようなものが主語として具現するかということに関しても変化が起こったであろうという仮説を立て、それを検証している<sup>2</sup>。その中から、本稿の Malory の語順に関する考察に関連するものを以下で紹介する。

Komen et al (2014) は原則的に文頭が主語の定位置になったことによって、それまで文頭に置かれた副詞句等が担っていた談話連結の役割は次第に主語が担うようになり、また文頭に副詞句が現れた場合もそれは無標の談話連結詞ではなくなっていったとしている。現代英語でも文頭に副詞句が置かれることはあるが、英語が V2 言語であったときと比較すると、その頻度は少なくなっており、またこのような要素が担う機能もより限定されたものとなっていると言う。現代英語における文頭の副詞句は前の談話との連結を示す前方照応的であるよりも、(5) が示すように、次に述べられる命題に関して時や場所を設定する後方照応的な役割を担うことが多い。

(5) A: How is business going for Daimler-Chrysler?

B: [In GERmany]<sub>Frame</sub> the prospects are [GOOD]<sub>Focus</sub>,  
but [in AMERica]<sub>Frame</sub> they are [losing MOney]<sub>Focus</sub>.

(Komen et al (2014:84))

(Krifka (2007:46))

以下では Komen et al (2014)の研究の中から、主語以外の文頭語句が担う機能についての通時的調査を示す。彼等は XP-S-V<sub>fin</sub>という語順において、文頭の XP が前置詞句または名詞句であり、かつ前置詞句の場合は前置詞と名詞句が隣接しているもの、また名詞句の場合にはそれが直接目的語か間接目的語であるものを選び、これらの名詞句が照応関係を持つ語が先行文脈に存在する割

合を通時的に調査している。(6a) は IME、(6b)は IModE からの例であり、(6a) では動詞の直接目的語が、(6b)では前置詞句が前置されている。

(6) a. (þe þridde is bounte þat is best of alle.)

*And þat þou schalt knowe by þese signus.* [cmhorses:23–25]  
and that you shall know by these signs

'(The third is the character [of the horse], and this is the most important of all.)

And you will know this by the following signs.'

b. (I got no Body to come back with me but the Supra-Cargo and two Men.)

and with **these** I walk'd back to the Boats. [defoe-1719:482-483]

(Komen et al (2014:105))

Komen et al (2014)によると、名詞句や前置詞句が文頭に前置された主節のうち、(6a-b)のように名詞句(前置詞句の中の名詞句を含む)が先行文脈への連結機能を持つ割合は、ME でおおよそ 60%、eModE で 40%強、IModE で 22%であり、時代とともに減少している。また IModE からの例である(6b)に見られる語順は現代英語においては全く適切な表現とまでは言えないということで、文頭に置かれた主語以外の名詞句が先行文脈への連結機能を自然な形で担える割合は、IModE 以降も現代英語に至るまで減少し続けていると考えられるとしている(Komen et al (2014:105))。

本論文では 4 節において、文脈連結機能という観点から Malory における主節の文頭要素を観察する。Fludernik (2000)が言う「ディスコースマーカーの氾濫」という Malory の特徴を考慮に入れ、その溢れるほどの談話標識の中で、前置された目的語や前置詞句(の中の名詞句)がどの程度先行文脈への連結機能を負っていたのかを考察する。

### 3. Malory の SV/VS 語順

#### 3.1. 分類

3 節では Malory の SV/VS 語順に関し、「(i) OE 的な古い語順」と「(ii) ME

期に新たに生じた語順」に分類して考察を行う。そのためには倒置現象に関し、どのような特徴が(i)または(ii)に分類されるのかを明確にしておく必要がある。Haerberli (2010)によると、(7a-d)のようなタイプの倒置は現代英語にも見られるということである。

- (7) a. [Another very generous person] **is Mr. McDonald.**
- b. [Round the corner] **came a big red bus.**
- c. [Thus] **ended his story.**
- d. [In the year 1748] **died one of the most powerful of the new masters of India.**

(Haerberli (2010:146))

**be** 動詞を伴う述語前置の文 ((7a)) や、受動文や非対格動詞が現れる文で場所句が前置された場合 ((7b))、また、[Thus]や[In the year 1748]のような付加詞が文頭に置かれた場合 ((7c-d)) には、現代英語でも VS 語順が可能である。従って、本稿ではこのような①**be** 動詞を伴う述語前置の文、②場所句が前置された文、③時の副詞句や *thus* などのある特定の付加詞が文頭に置かれた文、など現代英語でも倒置が起こりやすい構文以外での倒置（現代英語では起こり難い倒置）を「OE 的な古い語順」と分類する。

一方で、(8)のような倒置文は現代英語では非文とされる。

- (8) \*[In this rainforest] **can find a lucky hiker** the reclusive lyrebird.
- (Haerberli (2010:146))

(8)では他動詞とその主語の間で倒置が起こっており、このような倒置語順は OE や eME においては可能であったが、全体的な VS 語順の減少という流れの中で、現代英語に至るまでの過程で見られなくなっていった。Haerberli (2010) は The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (YCOE) と The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English 2 (PPCME2) を用いての調査により、否定辞、疑問詞、*then*-group 以外の語句が前置された主節において、他動詞と主語の倒置、またその他の動詞と主語の倒置が起こる割合を

調査している。OEでは否定辞、疑問詞、*then-group*以外の語句が前置された主節では、約60%の割合で他動詞とその名詞句主語の間に倒置が起こっているが、このような倒置は15世紀末には12.4%にまで減少している。他方、他動詞以外の動詞とその名詞句主語の間の倒置語順はOEの81.3%から徐々に下がるものの、ME後期でも51.5%となっており、この数字は倒置語順がまだ普通に見られることを示している(Haerberli (2010:147-148))。以下では(8)のような現代英語では見られなくなった、他動詞とその主語の間の倒置を「OE的な古い語順」とする。

「ME期に生じた新しい語順」としては、否定辞が文頭に置かれた主節における非倒置語順をこれに分類する。OEにおいては疑問詞、否定辞、または*then-group*が文頭に現れる主節では名詞句主語だけでなく、代名詞主語も動詞の後ろに現れることが一般的であり、また現代英語でも否定要素の前置は倒置を引き起こす。しかしMaloryでは(9)のような否定辞前置文においても倒置が起こらず、SV語順が見られることがある。

(9) but *in no wyse* the quene wolde nat suffir her wounded  
knyghtes to be fro her (Malory 657: 2-3)

またHaerberli (2010)によると、疑問詞、否定辞、または*then-group*以外の要素が文頭に置かれた主節において、OEでは殆ど起こらなかった代名詞主語の倒置がMEにおいては或る程度の頻度で起こっているということである。YCOEとPPCME2を用いた調査では、このような代名詞主語の倒置はOEで1.5%とほんの僅かであるのに対し、MEではChaucer (Boethius, Melibee, Parson, Astrolabe)で50%、Trevisa (Polychronicon)で0%と、作品によりかなりのばらつきがあるものの、ME期の平均では二桁の割合で起こっている(Haerberli (2010:147))。ME以降VS語順が減少していくなかで、この全体的な流れに逆行するように代名詞主語に関しては倒置語順が増加していくという現象が起こっており、興味深い。なお同調査によると、Maloryにおいて、疑



問詞、否定辞、または *then-group* 以外の要素が文頭に置かれた主節で代名詞主語の倒置語順が起こる割合は 12.9% ということである。次節ではこのような環境における代名詞主語の倒置と、上述した、否定辞が文頭に置かれた主節における非倒置語順を「ME 期に生じた新しい語順」として扱う。

以上をまとめると、

- (10) (i) OE 的な古い語順(ME 期に次第に消失に向かった語順):
- (1) 他動詞とその主語の倒置
  - (2) ① **be** 動詞を伴う文での **述語前置**、② 受動文や非対格動詞が現れる文での **場所句前置**、③ **時の副詞句や thus などのある特定の付加詞が文頭位置を占めること、以外の要因で引き起こされる VS 語順**
- (ii) ME 期に新たに生じた語順:
- (1) 否定辞が文頭に置かれた主節における非倒置(SV)語順
  - (2) 疑問詞、否定辞、または *then-group* 以外の要素が文頭に置かれた主節における代名詞主語の倒置

### 3.2. Malory に見られる SV/VS 語順

#### 3.2.1. *then-group*

以下ではまず OE で頻繁に起こり、ME でもまだ多く見られる *then-group* の語句に後続する VS 語順の例を挙げる。Haeberli (2002) の分類ではこれらは Type I inversion に属すると考えられる。

- (11) **Thenne stood the reame** in grete jeopardy long whyle (Malory 7: 14)
- (12) **Than spake Igrayne** and seyde (Malory 30:29)
- (13) And therefore **now shall ye** se what I shall do. (Malory 426: 12)
- (14) And alas! **now have I loste** all the worshyp that ever I wanne (Malory 467: 34-35)
- (15) '**Now am I** sure thys lettir woll telle us what she was and why she ys com hyddir.' (Malory 641:3-4)
- (16) **Now rydith Galahad** yet withouten shyld (Malory 524: 36)

文頭の þa ('then'), þonne ('then'), nu ('now') は OE 以来名詞句主語に限らず代名詞主語に関しても高頻度に VS 語順を引き起こしてきた。(11-16) が示すように、Malory においても *thenne*、*than* ('then') や *now* の後ろの倒置語順は主語が名詞句か代名詞かに関わらずに起こっている。倒置語順一般について言える

ことだが、これら *then-group* の語の後ろにおいても *be* 動詞や非対格動詞、また助動詞が VS 語順に現れることが多く、(11)、(13)、(14)、(15)のような例は数多く見られる。しかし(12)では *spake*、(16)では *rydith* が主語に先行しており、このような非能格動詞が倒置語順に起こることも *Malory* では珍しくない。*thenne*、*than* ('then') や *now* の後ろの倒置は *Haeberli* (2002)の言うところの *Type I inversion* であり、このタイプの倒置は *ME* でも多く起こること、また、*Malory* では *then-group* の語が極めて頻繁に使用されているという要因が重なって、これらの語の後ろで観察される倒置語順の数自体が非常に多い。従って *then-group* の語の後ろでは非能格動詞だけでなく、後述するように他動詞の倒置語順が観察されることも少なくない。

*now* に関しては、場面転換の際に“*now turn we*”, “*now leave we*”といった、決まった型の表現が繰り返し使われていることが、*now* に後続する倒置語順が極めて多く観察されることの理由の一つである。(17-18)はそのような場面転換の例である。

- (17) **Now turne we** unto the eleven kynges that returned unto  
a cite that hyght Surhaute (Maloy 27: 6-7)
- (18) And **now leve we** of a whyle of sir Ector and of sir Percyvale,  
and **speke we** of sir Launcelot that suffird and endured  
many sharpe showres (Maloy 495: 23-29)

一方で、以下の(19)、(20)は *then-group* の語に導かれる主節において名詞句主語((19))、また代名詞主語((20))が SV 語順(非倒置語順)で現れている例である。*OE* においては代名詞主語であっても VS 語順が一般的であったこの環境において、*ME* 後期の作品である *Malory* では主語が名詞句であるか代名詞であるかに関わらず SV 語順が観察されることも少なくない。

- (19) **Thenne Uther Pendragon torned** hym and said in herynge of  
them alle, (Malory 7:8)
- (20) A, my dere fadir! **now I have** nede of your helpe, (Malory 499: 39)

OE、ME において倒置語順が多く見られる *than*-group の後ろでも、(19-20) のように非倒置語順が起こることは、Malory の語順の中で現代英語に繋がる変化を観察できる点の一つである。thenne、than、now の後ろで SV 語順と VS 語順が混在しており、VS 語順から SV 語順への変化の中であって、どのような要素が非倒置の要因となっているのかを考察することは興味深い、実際には非倒置と倒置を分ける決定的な要因は存在しないように思われる。上で見たように、名詞句主語でも代名詞主語でも倒置、非倒置どちらの語順にも現れ、また(21-22)が示すように、主語の長さもこれら 2 つの語順の選択について絶対的な要因にはなっていない。

- (21) Than **all the knyghtes and ladyes that were there wepte**  
as they were madde (Malory 696: 26-27)
- (22) Than **kynge Arthur and all the kynges and knyghtes**  
kneled downe (Malory 668: 33)

(21)では all the knyghtes and ladyes that were there、(22)では kyng Arthur and all the kynges and knyghtes という長い名詞句が主語であるが、それぞれ wepte、また kneled という動詞に先行している。頻繁に倒置語順が見られる than の後ろにおいても、長い主語が動詞に先行し、非倒置語順になっており、主語の重さが語順を決定する主な要因でないことを示している(小林 2013)。

また、名詞句主語でも代名詞主語でも倒置、非倒置どちらの語順にも現れるため、情報の新・旧も語順に決定的に関与しているとは言えない。このように Malory における *then*-group の後位置における倒置・非倒置にははっきりした原則が見いだせない。OE において原則的に全ての主語に関して倒置を引き起こしていた文頭の *then*-group に、現代英語では非倒置語順が後続するようになる過程で、どのように非倒置が一般的になっていったのかを考察するためには、Malory よりも古い時代の作品を複数研究する必要がある。

### 3.2.2. 他動詞

現代英語において他動詞の倒置は起こり難いが、3.1 節で述べたように、Haerberli (2010)によると OE では否定辞、疑問詞、*then-group* 以外の語句が前置された主節で、約 60%の割合で他動詞とその名詞句主語の間で倒置が起こっている。このような他動詞の Type II inversion は 15 世紀末には 12.4%にまで減少しており、15 世紀後半の作品である Malory においては 14.9%ということである (Haerberli (2010:147))。以下では Malory におけるこの「OE 的な古い語順」—他動詞の倒置—に焦点を当てる。

(23-29)に示すように Malory では *than* の後ろでも、また前置された目的語や副詞の後ろでも他動詞の倒置が見られる。文頭の要素+動詞+主語を太字で示す。

- (23) **Than had sir Gawayne** suche a grace and gyffte that an holy man  
had gyvyn hym (Malory 704: 8-9)
- (24) **Than shall ye knowe** that this is he that lovyth the lady of the  
castell (Malory 217: 7)
- (25) And **there dud sir Lameroke** mervaylus dedys of armys  
(Malory 216: 21-22)
- (26) But **the sorow that dame Lyonesse made there may no tunge**  
**telle** (Malory 207: 19-20)
- (27) '**Such one saw I,**' seyde kynge Arthure (Malory 28: 31)
- (28) And **so toke he** us severally (Malory 83: 17)
- (29) but **well undirstood sir Trystram** that sir Dynadan myght  
nat endure ayenste sir Launcelot (Malory 458: 34-26)

Malory の作品を通して助動詞の倒置は多く、他動詞構文の倒置も(24)や(26)のように助動詞が倒置されているものが多い。これらを他動詞の倒置と呼ぶべきかどうかについては異論もあるかもしれないが、例えば(26)においては、'the sorow that dame Lyonesse made there'という他動詞 *telle* の目的語が前置され、それが倒置を引き起こしていると考えられるので、その意味においては他動詞構文の倒置と分類できるであろう。

また Malory に見られる他動詞の倒置を観察すると、その中には他動性の低い他動詞がかなり含まれていることが理解できる。(23)には他動詞 *had* が現

れるが、この文は「サー・ガウェインにはある聖職者から与えられた恩恵があった」ということを表しており、had は状態動詞である。その他(24)の know、(29)の undirstood も状態動詞である。このように倒置語順で現れる他動詞の中には、形式的には目的語を取る他動詞であっても、意味的には他動性が殆ど感じられないものも多い。Haeberli (2010)によると、Malory において否定辞、疑問詞、*then-group* 以外の語句が前置された主節で他動詞の倒置が起きる割合は 14.9%ということであるが、Malory における他動詞の倒置構文はこの数字が示唆するよりも生産性が低かったのではないかと思われる。次節で目的語の前置が引き起こす倒置を考察する際にも述べるが、目的語が前置されて主語と他動詞が倒置されるというパターンにおいては、see などの限られた種類の動詞が或る決まった表現形式で繰り返し現れることが多く、それ以外の他動詞の倒置語順は助動詞を伴うものを除くと多くは見られない。このことと、倒置語順に起こる他動詞の中には状態動詞も少なくないことを考え合わせると、他動性をもった動詞が倒置語順に起こる構文は、Malory において既に強い生産的をもったものではなくなっていたと考えられる。

### 3.2.3. 現代英語では倒置の引き金となり難い文頭の要素

前節では OE 的な古い語順として他動詞とその主語の倒置について述べた。本節ではもう 1 つの古い語順、即ち現代英語では文頭に置かれても倒置の引き金とはなり難い語句の後続部における倒置語順を取り上げる。現代英語で倒置の要因となるのは、① **be** 動詞を伴う文での**述語前置**、② 受動文や非対格動詞が現れる文での**場所句前置**、③ **時の副詞句**や **thus** などのある**特定の付加詞が文頭位置を占める**ことであるため、これら以外の要因で引き起こされる倒置語順を観察する。

まず他動詞の目的語の前置を取り上げる。前節で他動詞とその主語の倒置について考察した際にも目的語前置の例文(26-27)を挙げたが、他にもいくつかの

例を下に示す。

- (30) [Her deth] **shall I never forgete** (Malory 406: 24)  
 (31) '[That] **shall I amende,**' seyde Arthure. (Malory 33: 15)  
 (32) 'Sir, [grete wronge] **have they done** me and you bothe.'  
 (Malory 406: 20)  
 (33) And [all thes wordis] **seyde sir Palomydes** (Malory 454: 18)  
 (34) And [all thys] **aspyed sir Palomydes** (Malory 456: 37)  
 (35) And [all that] **aspyed the quene** (Malory 343: 9)  
 (36) [That] **saw the Kyng** with the Hondred Knyghtes and ran unto  
 sir Kay (Malory 19:4-5)

(30-32)は助動詞と主語が倒置している例、(33-36)は他動詞と主語が倒置している例である。「誰々はこれ(この様子)を見ていた」ということを表現する際に、(34-36)のように *thys* や *that* が前置され、*aspyed* や *saw* といった動詞とその主語の倒置が起こるといふ例は多く見られる。(26)や(30-32)のように助動詞が主語に先行する例や、(34-36)のように一種の定形表現のような例は或る程度の頻度で起こっているものの、このような例を除くと、目的語前置によって引き起こされる他動詞とその主語の倒置は余り多くない。

次に文頭に置かれると現代英語でも倒置の引き金となり得る語句一場所句や、時の副詞句、また *thus* 等の副詞-以外の副詞的要素が文頭に現れる文について考察する。

- (37) So [with that] **departed the damesell** and grete sorow she made  
 (Malory 40: 10)  
 (38) And [othir than good love] **loved I** never sir Launcelot du Lake.  
 (Malory 639: 35-36)  
 (39) And [full well] **knew La Beall Isode** that hit was sir Palomydes  
 that faught wyth sir Trystram (Malory 457: 21-22)  
 (40) yet [full worshipfully] **have ye** encheved this, and bettir shall  
 ye do hyreaftir. (Malory 484:25-26)  
 (41) And [for the dethe of my noble sonne sir Lamorak] **shall**  
**myne harte** never be glad (Malory 490: 18-19)

(37)の'with that'のような前方照応により先行文脈との連結機能をもつ副詞句

の後ろでも、またそれ以外の様々なタイプの副詞句の後ろでも倒置語順が頻繁に見られる。やはり(40-41)のような助動詞の倒置が多く見られるが、(37-39)のように語彙動詞の倒置も少なくない。また(37)、(39)、(41)のような名詞句主語の倒置も、(38)、(40)のような代名詞主語の倒置も起こる。文頭に置かれて倒置を引き起こす副詞句の意味や機能も様々であり、名詞句主語も代名詞主語もこの倒置語順に現れることを考えると、このタイプの OE 的な古い倒置語順は Malory においてまだ生産的なものであったと考えられる。

### 3.2.4. ME 期に生じた新しい語順

OE においては文頭に置かれた否定辞の後続部では名詞句主語だけでなく代名詞主語に関しても高頻度に VS 語順(倒置語順)が観察される。現代英語でも否定辞に導かれる節では原則的に倒置が起こる。従って現代英語の否定倒置構文は OE 以来の言語現象を受け継ぐものであると言えそうであるが、実際には、前置された否定辞の後続部における倒置は ME では義務的には生じていないということが観察される。

- (42) And [never in no batayle, turnement nother justys] **they bare**  
 none of hem no maner of knowlecchyng of their owne armys  
 but playne whyght shyldis, (Malory 650: 25-27)
- (43) but [in no wyse] **the quene wolde never lette** none of the ten  
 knyghtes and her ladyes oute of her syght (Malory 652: 36-37)
- (44) but [in no wyse] **the quene wolde nat suffir** her wounded  
 knyghtes to be fro her, (Malory 657: 2-3)

(42-44)は否定辞を含む副詞句が前置された文において非倒置語順が見られる例であり、(42)には代名詞主語、(43-44)には名詞句主語が現れている。Malory では、他の様々な文頭の語句と同様に否定辞を含む副詞句も、その後続部には倒置語順も非倒置語順も起こる。このような現象は作者個人の文体的な特徴であるのか、ME の或る時期の文法的な現象であるのかを検証するためには、

Malory と同時期の別の作品、また時代を異にする作品を研究する必要がある。  
う。

もう 1 つ ME 期に新たに見られるようになった語順は疑問詞、否定辞、*then-group* 以外の要素が文頭に置かれた主節に起こる代名詞主語の倒置である。ME 以降全体的な流れとして VS 語順が減少していく中で、OE では殆ど起こらなかった代名詞主語の **Type II inversion** (疑問詞、否定辞、*then-group* 以外の要素に導かれる文での倒置)が増加していったのは興味深い。Haerberli (2010)によると Malory における代名詞主語の **Type II inversion** は 12.9%ということである。このような代名詞主語の倒置は既に本節で示した例文の中にも見られる。(30-32)、(38)、(40)が代名詞主語の倒置の例であり、(30-32)と(40)は助動詞と代名詞主語が倒置している。ここでも助動詞の存在が倒置を起しやすくする要因となっていることが伺える。

Haerberli (2010)の調査によると、Malory が属する ME4 期の代名詞主語の倒置は、作品によって 0%から 51.7%までとかなりのばらつきがある。一般には名詞句主語の **Type II inversion** が多い作品ほど同様の環境での代名詞主語の倒置が多いという傾向が見られるが、ME3 期の *Mandeville's Travels* は他動詞以外の動詞と名詞句主語の倒置が 80.1%と高頻度で起こっているが、代名詞主語の倒置は 3.1%と極めて少ない。また同じく ME3 期の Chaucer の散文では名詞句主語の倒置が *Mandeville's Travels* よりやや少なく 73.6%、しかし代名詞主語の倒置は 50%である (Haerberli (2010: 147))。代名詞主語の倒置の起きやすさは作者個人の文体的な好みによるところが大きいようではある。今後複数の作品を研究することにより、代名詞主語の倒置が高頻度に起こる作品では、①助動詞と代名詞主語の倒置の割合に比して、語彙動詞と代名詞主語の倒置の割合がどのようであるか、②**Type II inversion** の中でも本稿で「OE 的古い語順」に分類した、目的語の前置などによる代名詞主語の倒置が多く見られるのか、または現代英語でも倒置を起しやす場所句前置などの環境での代名詞



主語の倒置が多いのかなどを明らかにしていきたい。

#### 4. 文頭要素の文脈連結役割

2.2 節で紹介したように、Komen et al (2014)は V2 の消失とともに、原則的には文頭が定位置となった主語が先行文脈との連結機能を担うことが多くなり、主語の前に置かれた語句が先行する談話との無標の連結機能を持つ割合が減少したということ、コーパスを用いた調査により示している。彼等はこの研究で、文頭に置かれた目的語、または前置詞句の中の名詞句について、それと照応関係を持つ語が先行文脈に存在する割合を通時的に調査し、それが時代とともに減少していることを明らかにしている。文頭の目的語や前置詞句の中の名詞句が先行文脈への連結機能を持つ割合は、ME でおおよそ 60%、eModE で 40% 強、lModE で 22% ということである。Malory は ME でも後期 ME の作品であるため、この作品が書かれた時期にはその割合は ME の 60% というよりも eModE の 40% 強に近いところまで減少していたかもしれない。

Malory に見られる文頭要素の連結機能について考察するにあたって、この作品の特徴として、Fludernik (2000)が「ディスコースマーカーの氾濫」と呼ぶように、**then**、**now**、**so** などのディスコースマーカーが多用されているということに注意を払う必要がある。(45)ではディスコースマーカーとしての **than** や **so**、そして前文との連結機能をもつ語を太字で示す。

- (45) And **so** on the morne sir Palomydes made hym redy to come into the fylde, as he dud the fyrste day, and there he smote downe the Kyng with the Hondred Knyghtes and the Kyng of Scottis. **Than** had La Beale Isode ordayned and well arayde sir Tramtryste with whyght horse and whyght armys, and **ryght so** she lette put hym oute at a prevy postren, and he cam **so** into the felde as hit had bene a bryght angell. And anone sir Palomydes aspyed hym, and **therewith** he feautred hys spere unto sir Trystramys and he agayne unto hym, and **there** sir Trystrams smote downe sir Palomydes unto the erthe.

(Malory 240: 21-29)

so、than、ryght so という初めの 3 つのディスコースマーカー以外にも、so、therewith、there という先行文脈との連結機能を持つ語が次々と現れている。前文との論理的関係を示す語、または前文の要素と照応関係にある語がこのように多用されているのが Malory の特徴と言える。前文との橋渡しをする語が Malory では溢れるほど使用されているのである。

その Malory において、文頭に置かれた主語以外の要素が先行文脈との連結機能を担っている例を(46-54)に示す。

- (46) And **suche promyse** I have made (Malory 236: 14-15)  
 (47) **suche one** herde they never none in Irelonde before that tyme.  
 (Malory 238: 24-25)  
 (48) '**That fayre corse** woll I se,' seyde the kynge.  
 (Malory 640:38)  
 (49) 'Yee, sir, and **that** know you well inow.' (Malory 459:43)  
 (50) 'A, sir! **that steede** he hath benomme me with strengthe  
 (steed) (took away)  
 (Malory 544: 31)  
 (51) And **of hym** kynge Arthure made passynge grete joy  
 (Malory 353: 31)  
 (52) **In the same wyse** ded sir Saphir and sir Ector  
 (Malory 404: 33-34)  
 (53) So **of this** noyse and fame sprange into Cornwayle and unto  
 them of Lyones (Malory 477: 9-10)  
 (54) And **therewyth** sir Launcelott kneled adowne (Malory 351: 6)

(46-50)は前置された目的語が前文との連結機能を持つ例、(51-53)は前置詞句が連結機能を持つ例である。(54)の therewyth は pronominal adverb であり、この therewith において there は it や that の意味を担う代名詞の役割を果たしている。Malory では therewith、therewithall 等の pronominal adverb が前文との連結機能を担う文頭要素として頻繁に起こる。また、(55)では meanwhile に前方照応の指示詞が付加されており、前文との繋がりをより明確に示している。

(55) **This meanewhyle** cam the langayge and the noyse unto kynge  
 Melyodas (Malory 233:33-34)

このように、Malory においては主語以外の文頭要素が先行文脈との繋がりを明確に示す働きをすることが多いと言える。文頭が主語の定位置になること(=SV 語順の確立)と、主語に先立つ語句が先行文脈との連結機能を担う割合が減少することは、Komen et al (2014)の研究が示すように、英語史全体を見わたせば平行して起こったと言えるのであろう。Haeberli (2002)がおこなった Type I inversion (場所句の前置など現代英語でも倒置を起ししやすい環境での倒置)を除いた調査では、Malory における名詞句主語と動詞の間の非倒置語順の割合は 87.1%とかなり高い。このように Malory においては SV 語順が高頻度に起こりながらも、上に示したように、主語以外の文頭要素が先行文脈との連結機能を担う頻度も高い。Komen et al (2014) が示す英語史の大きな流れに照らせば、これは Malory に特異的な現象ということになるのであろう。

また、Komen et al (2014)の研究が示唆するところから従えば、Malory において主語以外の文頭要素が文脈連結機能をもつ割合が比較的高いのであれば、この作品では先行文脈と照応関係にある無生物主語が現れる頻度が低いということになるかもしれない(2.2 節の「注 2」参照)。Malory における文頭要素の働きと生物・無生物主語との関係は今後の研究で明らかにしていきたい。

## 5. まとめ

本稿では Malory の SV/VS 語順について「OE 的な古い語順」と「ME 期に生じた新しい語順」という区分で考察をおこなった。*then-group* に導かれる主節は OE では VS 語順が原則的であったが、Malory では倒置(VS)、非倒置(SV)が混在しており、主語が名詞句か代名詞か、また主語が長いか短いかなどは語順を決定する絶対的な要因にはなっていない。他動詞の倒置は Malory において或る程度の頻度で起こるが、多くの場合助動詞と主語が倒置されているか、see などの限られた種類の動詞が定形表現のような形で使われており、このよ

うなパターンを除くと他動性の高い他動詞が倒置語順で起こることは多いとは言えない。その一方で、'with that'などの現代英語では倒置の引き金となり難い文頭の副詞的要素の後ろで、語彙動詞とその主語の倒置が頻繁に起こっており、またこの場合名詞句主語でも代名詞主語でも倒置が起こる。この点では Malory には「OE 的な古い語順的特徴」が残っていると見えよう。

また「ME 期に生じた新しい語順」として、①否定的要素が前置された文における非倒置語順と、②OE では殆ど起こらなかった、疑問詞、否定辞、*then-group* 以外の要素が文頭に置かれた主節での代名詞主語の倒置(代名詞主語の Type II inversion) について考察した。否定倒置構文は OE から現代英語まで引き継がれている構文のように思われるが、ME 期には前置された否定辞の後ろで非倒置語順も見られる。Malory においてはこの環境で名詞句主語も代名詞主語も非倒置が起こる。また Malory における代名詞主語の Type II inversion は、助動詞をともなうパターンが多く見られる。Haeberli (2010) の研究は ME 期の代名詞主語の Type II inversion は作者によるばらつきが非常に大きいことを示しており、このような代名詞の倒置は文法現象として説明するよりも文体的特徴として捉えるべきであるとも考えられる。しかし ME 以降全体的な流れとして VS 語順が減少していく中で、OE では殆ど起こらなかった代名詞主語の Type II inversion が ME で増加していったこと、またその後減少していったことを、他のどのような文法現象と関連して説明できるのかを探ることは興味深く、またこのような、他の文法現象との関連性という意味において、ME における代名詞主語の Type II inversion は文法的説明の対象となりうるであろう。

最後に Malory における文頭要素の連結役割について考察した。Komen et al (2014) によると、OE から lModE にかけて、主語以外の文頭要素が先文脈との連結機能を担う割合が減少してきたということである。彼等の研究に従えば、文頭が主語の定位置になること(=SV 語順の確立)と、主語に先立つ語句が先

行文脈との連結機能を担う割合が減少することは、平行して起こったということになる。しかし Malory はディスコースマーカーや前文との橋渡しをする語がきわめて頻繁に使用されているということが特徴的であり、文頭に前置された名詞句（前置詞の目的語を含む）が文脈連結機能を担う割合もかなり高い。従って Malory においては SV 語順が高頻度に起こりながらも、主語以外の文頭要素が先行文脈との連結機能を担う頻度も高いということになる。4 節では Komen et al (2014) が示す英語史の大きな変化の流れの中で、Malory がこのような特異性をもつことを考察した。

## 注

1. しかし 2.1 節に示すように、Haeberli (2002)によると、OE において *then*-group 以外の語句（前置詞句など）が文頭に置かれた場合、名詞句主語が SV 語順を示すことも珍しくなく、その割合はおよそ 25%である。
2. Komen et al (2014) は、英語が V2 言語でなくなり、文頭が主語の定位置となるに従って、先行文脈との連結機能は主語が担うことが多くなり、従って先行文脈と照応する内容が主語として具現する頻度が増したとしている。そのため無生物主語が増加したと考え、その検証を行っている。

## 資料

Thomas Malory (1971) *Complete Works*, ed. by Eugene Vinaver, 2nd ed. Oxford University Press, Oxford.

## 参考文献

- Fludernik, Monika (2000) "Narrative Discourse Markers in Malory's *Morte D'Arthur*," *Journal of Historical Pragmatics* 1(2), 231-262.
- Haeberli, Eric (2002) "Observations on the Loss of Verb Second in the History of English," *Studies in Comparative Germanic Syntax*:

Proceedings from the 15th Workshop on Comparative Germanic Syntax,  
ed. by C.J.W. Zwart and W. Abraham, 245-272, John Benjamins,  
Amsterdam.

Haeberli, Eric (2010) "Investigating Anglo-Norman Influence on Late  
Middle English Syntax," *The Anglo-Norman Language and Its Context*,  
ed. by R. Ingham, 143-163, York Medieval Press, York.

小林美樹 (2013) 「Malory における語順と情報構造 : than または there に導  
かれる文を中心に」『神田外語大学紀要』第 25 号, 133-156, 神田外語大学.

Komen, Erwin R., Rosanne Hebing, Ans M.C. van Kemenade and Bettelou  
Los (2014) "Quantifying Information Structure Change in English,"  
*Information Structure and Syntactic Change in Germanic and Romance  
Languages*, ed. by Bech, Kristin and Kristine Gunn Eide, 81-110, John  
Benjamins, Amsterdam.

Krifka, Manfred (2007) "Basic Notions of Information Structure," *The  
Notions of Information Structure*, Interdisciplinary Studies on  
Information Structure, 6, ed. by Caroline Féry, Gisbert Fanselow and  
Manfred Krifka, 13-55, Universitätsverlag Potsdam, Potsdam.